

高校で下宿

8月は、田舎では旧盆の季節。典型的な田舎育ちの自分は、一応8月ともなると、会社から夏休みを貰って、田舎に帰る。オリジナルでは、会社としての一斉夏休みは無いが、7月から9月までの間の任意の3日間、夏休みとして休暇がとれる。63歳にもなってしまう、子供たちも大きくなって（長男40歳、二男36歳の中国住まい、長女30歳の東京住まい）家族全体で動く事もなくなってしまう我が家で



は、毎年自分一人が郷里の長野県四賀村（現松本市）に帰る事が多い。「奥様はどうしたのだ！」と聞かれそうだが、小さな塾をやっている関係で、夏休みは返って忙しい。大手学習塾とは違って、過剰な密着サービスが身上的奥様は、学校の夏休みは、朝、昼、晩とフル回転で、生徒に尽くす（生徒がどう思ってるかは知らないが）。結果、疲れ果てるから、盆休みはゆっくり休養をとらねばならない。したがって、会社内でも定評のある（実はホンの一部だと思うが）世話のかかる自分は、一人愛車プリウスを駆って、故郷に向かう事になる。

ところで自分には今のところ、実家が二つある。一つは88歳の母が住む長野県原村である。5年前に自分の力で立てた瀟洒なペンション風の戸建てに住む、一人暮らしの母親の家である。ひとり暮らしと言って、姉の嫁いだ家の敷地の中に住んでいるので、準一人暮らしとも言えるが、認知症にも縁が無く、電話の

清野吉光氏のコラム 第57回

団塊 耕 志 録



清野 吉光(きよの よしみつ) 略歴

1950年 長野県四賀村生まれ、松本深志高校卒業。1968年上智大学外国学部ロシア語科入学、1971年 中退。その後印刷関係など様々な職業に従事。1976年清水市の日の丸交通入社。1980年静岡市内の事務機器センターに入社。1982年システムオリジンを仲間と創業、専務取締役。1992年代表取締役社長就任。2000年株式会社創立、現取締役会長。2007年タクシアシスト代表取締役社長に新任。現在に至る。

「物語は何処に？」

声は50歳の頃と変わらず、多少覚束ないが携帯メールもこなす。同期の友人が親の介護で苦労しているという話を聞くと、元気でいてくれる事に本当に感謝をしなくてはいけないと思う。またもうひとつの実家は、当然にも自分が生まれ育ち、今は9歳上の兄弟夫婦が守る長野県東筑摩郡四賀村の実家である。2005年に平成の大合併で松本市となったが、まさに四方を山に囲まれた山村そのものである。自分は中学まで四賀村に住み、高校は松本市に下宿をしていた。バスと電車を乗り継いで、自宅から高校まで通えない事はなかったが、1時間以上かかり、部活（今の体型からは考えられないサッカー部）に専念したかった自分は、親に無理を言っただけで、下宿生活をさせてもらった。自分の通った松本深志高校には寄宿舎は無かったが、当時の長野県は大学区制度だったので、長野県全域から入学する事ができ、結果このような下宿生活をする学生がクラスに2割がた居た。また中学浪人

をした生徒も、調べた訳では無いが、やはり2割くらい居たのではないかと思う。名うての厳しい英語の教師に、授業をサボったのをみつかって、「お前は生意気だ、浪人か！」と怒鳴られたのを、今でもしっかり覚えていてる。自分は一応現役生だったが、小、中学校と、先生によっては、かなり反抗的だったので、その片鱗（？）が出てしまったのかも知れない（その英語の先生は東大にも係わらず、ヤクザの世界に入って、刺青があると評判だった。厳しい先生だが、尊敬もしていたのに、叱られた。）。

ところでその下宿の先輩に、ヒョんな事から四十六年振りに再開した。六月に行われた東京在住の高校同窓会に、その2年上の先輩が突然現れたのだ。高校の下宿生活と言うのは寄宿舎には負けるが、結構濃密な時間と空間を共有する。ましてこの先輩は埼玉大学に進学したあと、学生運動に入り、自分が高校3年の時に、あの三里塚にヘルメットを被って自分を連れて行

き、結果、自分は頭を一針縫う事になった。大した傷ではないが、自分のかなり曲がりくねった人生の先鞭をつけてくれた人だ！感謝したらいいのか、「この野郎！」と言ったらいいのか？（もちろん冗談！）

で、この昔美青年だった、今少し太めの懐かしい先輩と、以前このコラムにも登場した、定年で退職して暇だから付き合えと会社遊びに来た、一年上の、しかも隣部屋だったもつと濃密な先輩と3人で、下宿のおばさんの名前を冠した「村杉同宿会」という飲み会を結成する事になった。

60過ぎの叔父さん達が（御爺さんと言うのには少し可哀そうすぎる！）昔話に意気投合しているのは、外から見て、他愛ないと思われるかもしれないし、たしかに実際他愛ない。しかし、個人史的には大事な事だ。少なくとも自分の歴史（物語）を、それがどんなに外から見て問題のある、あるいは逆に平凡な人生であったとしても、それを肯定的に振り返る事が出来る

人は、幸せな人だ。そして、自分の人生をありのままに受容できるか否かは、過ごした人生そのものによるのではなく、多分、今現在の生き方によるのではないかと思う。

永遠には生きられない：

昨年、弊社の佐藤会長が亡くなった。もちろん、身近な人が亡くなったのは初めてでは無い。しかし、60歳を超えた自分自身の年齢もあり、また癌の告知から実際に亡くなってしまいうまでの時間の一端を（たったたった4カ月に満たない時間であった）共有した事から、会長の死に深く感ずることがあった。それは、人は必ず亡くなる、そして自分も又例外では無いという当たり前の事実であった。とすれば、いま生きている事自体が有り難い、そして自分の意識、また無意識の中で紡いできた自分の物語にできるだけ正対し（できたら記録し）、また一人では紡げない糸を共に紡いできた人達とできるだけ会って、

その紡いできたものの何たるかを確認して行きたい衝動に駆られている。

今年の夏、故郷四賀村で14年振りの中学校の同級生の同級会があった。5クラス250名のうち、60名近くが集まった。物故者は16名。昔の同級生と再び時間を共有する中で、自分の中学時代の物語が、自分の中で一層豊かになり、そしてたしかに定着した。この9月には高校卒業45周年の同学年会が開かれる。学校を卒業して、数年の同級会



も良い物だが、こうして還暦を超え、それぞれの物語を紡ぎ、それを披露しあえるのも、自分の物語の豊富化、相対化の良い機会だし、

思わぬ発見や視野の広がりがあるものだ。他人の物語を知る事は、自分の物語の発見にも繋がる。自分のエゴの殻さえ取り外す事ができれば、彼、彼女の物語は、また自分の物語でもある。そして何より我々が忘れがちなのは、実は愛すべき物語は友人だけでなく、自分の祖先、親、兄弟姉妹、そして何よりも妻、子供も、それぞれ物語をつむぎ、それを、意識的、無意識的に共有しようと生きてきた事実である。身近でありすぎるが故に、その物語の全体性に気がつかない。自分との日常的、直接的な関係性でのみ見てしまう。親の人生の全体、妻の人生の全体、子供の人生の全体を一人の人間の物語として思いをはせる事は難しい。が、それこそが、自分の人生の物語（人間の関係性の歴史）を感

ずるための出発点だと思う。
（2013年8月26日）

スマホでタクシー呼んだらタクチャージで充電
docomo, au, SoftBankの各種携帯電話・スマートフォン・タブレットに対応
iPhone 3G・4S・5, iPad mini, iPad, iPod touch・nano